

小学校社会科における戦争学習

－花岡事件の証言を中心的題材として－

泉 大地

1 論文構成

序章 問題の所在と研究の目的

第一節 問題の所在

第二節 研究の目的と方法

第三節 論文の概要

第一章 小学校社会科における戦争学習授

業実践の分析と考察

第一節 戦争学習の課題

第二節 オーラル・ヒストリーの課題

第三節 小学校社会科における戦争学習

授業実践の分析と考察

第二章 花岡事件の証言の分析と考察

第一節 花岡事件の概要

第二節 花岡事件の証言の分析

第三節 花岡事件の証言分析の考察

第三章 花岡事件に関する聞き取り調査の

結果分析と考察

第一節 聞き取り調査の概要

第二節 調査結果の分析

第三節 聞き取り調査の結果分析の考察

第四章 花岡事件を扱った授業実践の構想

第一節 花岡事件を扱った授業実践の紹介と検討

第二節 花岡事件を扱った授業実践の構想

終章 研究の総括と今後の課題

第一節 研究の総括

第二節 今後の課題

【付録】

【参考文献・参考論文・参考資料・参考

URL】

2 問題の所在と研究の目的

(1) 問題の所在

本研究を行うにあたっての小学校社会科における戦争学習の問題点を3点述べる。

1点目は、児童が戦争を学ぶことの大切さについての思いを高める必要があることである。「児童・生徒・学生の戦争認識はいまー小中高大・近現代史アンケートの分析を通じて」における『「昔の戦争」について学

習することは大切か』では、とても大切と答えた割合が中2高2大では軒並み7割以上の回答が得られている

るものの、小学5年の回答は6割にとどまっている。小学生の段階では、戦争への知識量が少なく、それに伴う歴史認識の形成についても不足していると筆者は考える。中・高へと継続的な戦争学習になるように小学校段階で戦争学習の重要性について感じられるような取り組みが必要であると考える。

2点目は、戦争体験者の減少において、戦争についての生の声や証言等を聞く場面が減少しているという点である。戦後70年を迎えた今、戦争体験者の減少は著しいのが事実である。今後は、戦争体験者から直接に話を聞く場面はなくなるため、それ

に代わる継承の方法について考えていく必要があると考える。

3点目は、小学校社会科における戦争学習の多くが東京大空襲や広島・長崎への原爆投下、沖縄戦といった国内における局所的事例が中心となっている点である。児童にとって、戦争が過去の事象というような扱いにならないように身近な地域における戦争学習を展開する必要があると考える。

これらの問題を受け、小学校における戦争学習では身近な地域の戦争学習をとおして、戦争についての歴史認識を形成していく必要があると考える。また、戦争体験者の減少に伴い、戦争の事実を継承していく方法についても考えていく必要がある。そのため本論文では、小学校社会科における戦争学習の考察を秋田県大館市花岡において実際に起こった花岡事件についての証言を中心的題材として、後世に向けた小学校社会科における戦争学習の構想を行っていく。

(2) 研究の目的と方法

本研究の目的は、児童の戦争についての歴史認識の形成と現行の小学校社会科における戦争学習での国内の局所的事例を中心とした学習からの脱却、また学習に伴う戦争の事実継承の再考察である。

戦後 70 年を迎えた今、私たち国民は過去の戦争に向き合い、それぞれが戦争についての歴史認識を持つことが大切である。これは、大人だけがすることではなく小学校の児童についても、小学生なりに考えていく必要があると考える。本論文では、花岡事件という地域に根付く戦争の実態について学習することで、上にある本研究の目

的について考えていく。

研究の方法は、まず戦争学習や体験者の語り・証言、いわゆるオーラル・ヒストリーの課題を明確にするとともに歴史地理教育者協議会発行の『歴史地理教育』に掲載されている小学校での戦争学習の分析と考察を筆者の設定する項目をもとに行う。次に花岡事件の概要をまとめるとともに、『花岡事件を見た二〇人の証言』『花岡事件五十周年記念誌』の 2 冊の文献に記載されている 33 名の花岡事件に関する証言の分析と考察を行う。また、この分析と考察をもとに筆者が実際に大館市において聞き取り調査を行う。

最後に、研究を通しての花岡事件を扱った小学校社会科における戦争学習の授業実践を構想する。構想にあたり、これまでに実践されてきた花岡事件を扱った授業の紹介と分析を行うが、ここでは小学校という枠組みにとらわれずに幅広い校種での分析と考察にあたり、筆者の授業実践の構想にいきたい。

3 論文の概要

(1) 第一章

第一章では、現在の小学校社会科における戦争学習の課題と語りや証言を用いたオーラル・ヒストリーの課題について、先行研究等の文献を中心に用いて述べている。そして、それらの課題を通して実際にこれまで行われてきた小学校社会科における戦争学習についての授業実践の分析と考察を行う。

第一節では、まず戦争学習の課題について明らかにした。課題を明らかにしていくうえで、歴史地理教育者協議会発行の『歴

『歴史地理教育』や『平和教育実践辞典』、『地域から見た歴史教育～徴兵の実態と戦争～』を参考にした。筆者は、戦争学習の課題について3点を挙げた。1点目は、戦争に対する非人間性や残虐性の認識を高めるような「学習内での戦争の原因・被害の実態の追究」である。2点目は、加害の事実に向き合うような「被害者の感情からの脱却」である。最後に3点目に、後世の平和への展望を児童が持てるように「戦争学習を基礎とした平和について考え実践する態度の育成」である。

第二節では、筆者の抱える問題意識に大きく関係する「戦争の事実継承」、いわゆるオーラル・ヒストリーの課題について述べた。戦争学習におけるオーラル・ヒストリーでは、戦勝国や敗戦国、それらの兵士、家族というように様々な視点において歴史を読み取ることができる。しかし、外池氏は「戦争の被害者の側面のみが強調されることになりやすく、加害者としての戦争体験が語られることがない」と述べる。これらの事を通して、筆者はオーラル・ヒストリーにおける課題として3点を挙げた。1点目は、「戦争学習において、公的な歴史解釈だけでなく、様々な視点に基づき継承を行う必要がある」こと。2点目が、「被害・加害の立場を明確にし、事実継承にあたる」こと。最後に3点目が直近の問題でもあるように、「戦争体験者の減少に対応したオーラル・ヒストリーの構築」である。

第三節では、前節までにおける研究を通して、これまで小学校社会科において実践された戦争学習の分析と考察を行った。分析の方法としては、以下の3段階の手順で行った。まず、歴史地理教育者協議会発行

の『歴史地理教育』の634号(2002.1)から798号(2012.12)までの10年間の実践の抽出にあたった。そこでは、「掲載号数(年月含む)」、「実践者」、「実践名」、「実践学年」、「実践地の地域素材の有無」、「授業題材の対象地域」、「授業内での証言集の有無」、「語りや聞き取りの有無」を整理した。次に、「地域の素材を取り上げた授業実践において提示した教材と児童の活動内容」について分析を行った。最後に、「証言集/語りや聞き取りを用いた授業実践の児童の活動内容」というように分析を行った。これらの分析を通じた考察を述べると、抽出することのできた実践例は25件あり、その中でも身近な地域素材を用いた実践は15件と割合では6割をこえていた。この点については、筆者の抱える身近な地域素材の活用による戦争に対する歴史認識の形成や戦争を学ぶ意義を高めたいという問題意識に合致しており、期待を持つことができる結果となった。また、戦争体験者からの語り等における継承を用いた実践については、25件のうち2件の1割に満たない結果となった。また、ここでは語りを一つの継承方法と考えたが、戦争体験者の減少を考えた時、語りのような人から人の継承については、なお一層厳しい状況であるため、証言集のような文献による継承の方法についても視野に入れていく必要があると筆者は考えた。

(2) 第二章

第二章では、本研究の中心にもなる「花岡事件」について主に述べている。また、現存する花岡事件に関する証言の分析と考察も行った。

第一節では、花岡事件の概要を『花岡事件を見た二〇人の証言』、『花岡事件五十周年記念誌』、『聞き書き 花岡事件増強版』の3冊の文献をもとにまとめた。また、筆者が本研究において花岡事件を時間的区分で見ると3つの時間に分けるということについても述べた。1つ目は、「花岡事件の要因期」（1942年11月27日の「華人労務者移入ニ関スル件」の閣議決定から1945年7月1日までの期間）、2つ目が「花岡事件」（1945年7月1日の中国人一斉蜂起から7月7日の暴動の収束までの期間）、最後に「事件収束後の平和に向けた取り組みの期間」（事件収束から現在までの期間）というように分けた。この3つの期間については以後証言等の分類でも用いることにした。

第二節では、実際に証言の分析を行った。分析の方法としては、まず「体験者名」、「体験時期・時間」、「体験場所」、「体験内容」の項目で分類を行った。そして、それらの体験内容を「本人体験」、「非体験」の内容であるのかを分類、同じように体験内容を「中国人への加害」、「中国人への援助」、「事件の詳細」、「中国人について」（主に生活内容や労働、会話）の4項目で分類を行った。「中国人への加害」、「中国人への援助」については証言者が直接的関わりであったのか、もしくは間接的な関わりによるものであったのかを「直接」、「間接」というようにさらに分類した。この分析では、証言者数33名から総計211件の証言が得られた。その中でも196件と全体の9割弱にあたる証言が本人体験によるものであった。また、「事件の詳細」に関する証言が53件（うち直接52）の25%、

「中国人について」の証言が77件（うち直接73）の36%と数多くの証言があったため、この2つの項目に関しては、さらに詳細に分析を行った。

次に、これらの証言を体験時期・体験場所ごとに分析を行った。分析の方法としては、まず体験時期を先に述べた「□花岡事件の要因期」、「□花岡事件」、「□花岡事件収束後の平和に向けた期間」を用いて分析を行った。また、体験場所については『フィールドワーク花岡事件—学び・調べ・考えよう』にあるマップを用いて14の場所ごとに分類を行った。ここでは、133件の証言に分類することができた。

第三節では、先に行ってきた証言の分析に関する考察を行った。考察においては「□体験時期・体験場所による証言数」、「□各証言の内容」、「□授業実践中における花岡事件に関する体験証言の有用性」という3点から行った。ここで、特に注目したい点として□についてである。体験証言について同じ体験時期・場所、そして体験であるにもかかわらず、証言に差異がみられることがある点である。例えば、中山寮職員と花岡町の在住者では、中山寮職員の証言は自分たちを擁護するような証言になっているのである。このことは、当時の人々の置かれた立場によって戦後の証言内容にも少なからず変化があるといえる。

(3) 第三章

第三章では、筆者が実際に秋田県大館市に赴き、花岡事件に関する聞き取り調査を行った。

第一節では、聞き取り調査の概要を述べ、第二節では聞き取り調査の結果の分析を行

った。分析の手順としては第二章におけるものと同じである。

第三節では、調査結果の分析についての考察を行った。この考察では、第三章での考察と同じ、□、□の視点を用いて行った。まず、聞き取り調査では1名の対象者から8件の証言を得ることができた。□については、今回の聞き取り調査において、前章での証言分析では証言数が少なかった場所における証言が得ることができた。このことは、調査対象をさらに広げていくことでまだまだ証言を得られるだろうと考えることができる。□については、証言の中に「中国人へおにぎりを渡す」という援助に関する証言があった。前章では援助に関する証言は数が少なかったため、授業を構想するにあたり取り上げていけるものだと考える。また、このような援助に関する証言は、当時のすべての日本国民が中国人に対して、粗悪な対応や関わりをしていたわけではないという根拠にもなるため、当時の日本政府や鹿島組を中心とした戦時下における国政の中心となるような立場の中国人の扱いが、いかに非人間性に満ちていたのかを印象付けるものになると筆者は考える。

(4) 第四章

第四章では、ここまでの研究を通して実際に花岡事件を扱った授業実践の構想にあたる。

第一節では、これまで過去に花岡事件を扱った授業実践の紹介と分析を行った。ここでは、以下4つの実践を取り上げた。「□庄司時二実践（小学校）」、「□佐藤守実践（中学校）」、「□芳賀義克実践（高校）」、「□秋田大学社会科教育研究室実践（中学

校）」の4つである。検討にあたっては、「1 教材として使われているもの」、「2 証言や聞き取り調査等での体験者の声が反映されているか」、「3 児童・生徒が花岡事件を主体的に考える場面があるのか（発問など）」、「4 敗戦後の平和への取り組みが含まれているのか」の4つの視点より行った。4つの授業実践全体を通して言えることとして、授業実践内において平和への視点が取り入れられていた点である。特に秋田大学社会科教育研究室実践については、大館市における平和に向けた市民運動の取り組みだけでなく、中国との国交回復からの花岡事件の賠償問題、そして今後のアジア諸国との関係について学習者が考える時間が設けられている点である。このように、地域に根付いている問題がアジア、世界につながるような問題であることは、学習者の戦争に対する認識を変化させていく機会になるといえる。

第二節では、これまでに明らかになったことを踏まえ、花岡事件を扱った授業実践の構想にあたった。構想にあたり、花岡事件を授業の題材として扱う意義を2点、授業の根底にあるねらいを5点挙げた。まず、意義であるが、「□地域における戦争学習の題材として風化させることなく継承すること」、「□加害立場からの学習による被害者の認識からの脱却」の2点である。また、ねらいについては「□戦争を具体的に追体験できるようにすること」、「□戦争を日本の歴史の中に位置づけられるようにすること」、「□戦争を地域に根ざした具体的なものにできるようにすること」、「□体験証言を用いて戦争の事実を継承すること」、「□戦争と平和の問題を密接に捉え追求できる

ようにすること」の5点である。授業実践計画では「単元の目標」、「単元観」、「指導観」、「単元計画」、「本時の計画」について提起した。単元計画では、本実践は7時間を予定し、とりわけ本時の計画は第2時間目を想定したものである。これは、先に述べた「□戦争を具体的に追体験できるようにすること」に対応しており、筆者が本論文において行ってきた、証言の分析を児童にも体験してもらうような授業内容である。

4 今後の課題

筆者は、本研究の今後の課題として大きく2点あると考える。

1点目は、現在残されている花岡事件に関する証言の分析の網羅である。今回は、文献資料による33名の体験証言と聞き取り調査における1名の体験証言の分析にあたったが、この他にも文献として残されているもの、映像資料になっているものがある。また、筆者自身の聞き取り調査でも十分と言える数の証言を集めることができなかった。分析の方法については、本論文中で確立することができたので、まだ分析にあたっていない証言についても体験証言を網羅できるようにしたい。この取り組みが、これから戦争学習を行っていく児童にとって有益な教材となるように継続して研究に取り組んでいきたいと考える。

2点目は、戦争体験の継承の構築についてである。筆者は、本論文中で体験証言の分析を用いた継承の方法を提起した。しかし、戦争体験の継承については戦争体験者の減少や時代の変化とともに形を変えていく必要があると研究を通して強く感じている。筆者が提起している体験証言の分析を用い

た継承については、現在戦争体験者の減少が著しいという事態を踏まえたものであるため、今後10年20年と戦争体験者がいない時代となった時には、また違った戦争体験の継承の方法を考えていかなければならないだろう。

最後になるが、筆者は4月から千葉県の教員として教壇に立つことになるが、本研究には携わっていきたいと思う。戦後70年を迎えた今、戦争に直接関わっていない私たちがどのように過去を捉えていくのかは、大変重要なことである。過去のあの戦争がなければ、今のような生活がないと考える人もいるように、先の大戦は私たちにとって重要な出来事であったのは間違いないことである。全く戦争を知らない子どもたちが、どのように戦争について考え、捉えていくのかは教員の関わりひとつで変わっていくだろう。また、花岡事件と同じように千葉県における地域の戦争についても教材化していきたい。いずれは、本研究を実際に筆者の地元でもある秋田県大館市において実践することを目指して、今後も取り組んでいきたい。